

## 保育のヒント～「科学する心」を育てる～

### 保育者の科学する心／学校法人七松学園 七松幼稚園（兵庫県）

砂場で遊ぶ子どもたちの姿に注目し、継続して記録をとったことはありますか？

一見、同じ様な遊び方をしているように見えても、「科学する心」の視点でよく観てみると、子どもたちは、様々なことに気付いたり、試したり、試行錯誤したりなど、実に多様な体験をしていることを読み取ることが期待できます。今回は、「保育者の科学する心」「保育者の育ち」という視点から、保育を振り返っている園の事例をご紹介します。



### ● ケーキができるかな？／3歳児

#### ✿ 事例

#### ● ケーキができたよ！（6月下旬）

好奇心→チャレンジ→気付き→失敗→再チャレンジ→新たな気付き

- 保育者がカップに砂を入れひっくり返し、砂のケーキを作っていると、SちゃんとMちゃんが、興味をもって「作りたい！」と言う。保育者は、二人と一緒に作る。砂をカップに詰める。

Sちゃん：「S、できた！」

Mちゃん：「M、できなかった！難しいー！」

保育者：「どうしてかなー？」と、つぶやく。

Sちゃん：「Mちゃんもう一回作る！」

- Sちゃんは、Mちゃんのカップを見て「砂な、沢山詰めなあかんで！」と言う。すると、Mちゃんは、砂をカップにたくさん詰め始める。

Mちゃん：「Mもできた！先生見てー！」

保育者：「おいしそうだね！」と、認める言葉をかける。

Sちゃん：「綺麗なお花載せる！イチゴにする！」と嬉しそうに言う。



#### ● こっちの入れ物はどうかな？（7月上旬）

好奇心→チャレンジ→気付き→失敗→再チャレンジ→新たな気付き

- 友達がカップに砂を入れケーキを作っている様子を見ていたKちゃんが、筒に砂を入れてケーキ作りに挑戦している。

- Kちゃん：「たくさん砂を入れるんだ」

保育者：「大きなケーキが出来るかな？」と期待感を伝える声をかける。

Kちゃんは、砂を詰めて、筒を抜いてみるが砂は形にならず、ケーキにならなかった。

保育者：「何でかな？」といいながら見守る

- Kちゃんは、何度か同じ筒で試してみるが、崩れてしまう。



- 崩れてしまうケーキを見たKちゃんは、長さの違う筒を道具入れからもってきて、中に砂を入れ試し始める。

Kちゃん：「ちょっと違うんだ」と、入れ物の大きさが違うことを保育者に伝える。

保育者：「本当だ！こっちの入れ物は小さいね。今度はどうかな？」と、期待を寄せる。

Kちゃんは、「それっ！」と言いながら、筒を逆さにして型を抜く。

Kちゃん：「先生！見て！できた！」

保育者：「本当だ！大きなケーキができたね！」と、認める言葉をかけ、Kちゃんの喜びに共感する。



## ● 今度はこっち！（7月上旬）

### 新たな不思議・好奇心→チャレンジ→気付き

- ケーキ作りが成功し、今度は様々な筒でケーキを作り始める。  
Kちゃんは、「小さいのができる！」などと言いながら、様々な筒に、黙々と砂を詰める。保育者は、傍らで取り組みを見守る。
- 今度は、泥状になった砂を使い、ケーキ作りに挑戦している。  
Sちゃん：「こっちの砂はどうかかな？」  
保育者：「どうかかな？ケーキできるかなあ？」と言いつき見守る。  
Sちゃん：「それ！あれ？！くっ付いてる！！」  
保育者：「本当だ！」  
Sちゃん：「砂ビシャビシャやった！」



## ● 環境構成で留意したこと

子どもたちの興味をとらえ、ケーキ作りに活かそうな季節の花や植物を自由に使えるように置いておく。様々な形のカップや様々な大きさの筒など、子どもたちが、自由に選んで試せるように置いておく。

## ● 保育者の援助

子どもと一緒にケーキ作りをしたり、見守ったりなどして、一人一人の思いに寄り添う。一人一人の取り組みへの期待感を寄せたり、繰り返し試していることを認めたりする。うまくいかない時は、一緒に考えたり、試したりするなど、支えとなるようにする。遊びの状況によって、子どもたちが遊びに取り入れられる（真似る）ような動きをしたり、友達との橋渡しになるような関わりをしたりする。

## ✦ 振り返って

- 砂場で砂に関わる中で、子どもたちは様々な疑問や好奇心を「？」から「！」に変える体験を自ら繰り返し行っていた。保育者の援助や環境構成も子どもたちの体験を支える一つの大きな要因だが、「夢中になる力」、「活動を継続する力」が、「科学する心」の育ちに大きく影響することが分かった。
- その為、活動は常にサイクル化（図1）され、遊びが続き深まることで、「科学する心」は日々変化し育っているということが言える。
- また保育者は、子ども一人一人が、サイクル（図1）のどの段階にいるかを把握して、事物との関わりに目を向ける必要がある。そして、保育者自身も「科学する心」をもち、子どものサイクル（図1）が継続的に繋がる関わりや環境構成を考える必要がある。

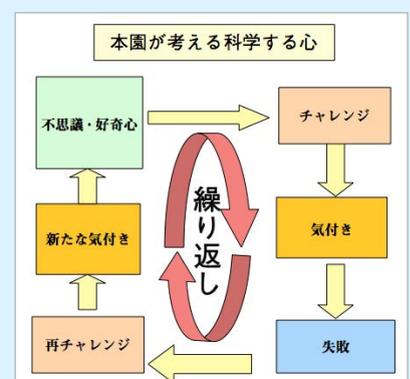


図1（図をクリックで拡大）

## ✦ 保育者の「科学する心」

子どもの姿から、保育者は“次はどうするのか？”、“何を発見したのかな？”などと子どもに対し、保育の視点から「？」を抱く。また、保育者が砂という媒体を通し、子どもと関わる中で遊びを共有する視点から「？」を抱く。また、保育者自身の教材としての砂に対する「？」が芽生える。この「？」を教材としての再発見に繋がる「！」に変えること、繰り返し取り組む中で「？」を「！」にする気持ちや活動、援助が「保育者の科学する心」だと考える。

## ✦ 保育者の育ち

---

今回の実践研究を通して、保育の中で行う言葉掛けや、援助に対し、保育者の意識が高まった。子どもの姿を捉え、保育者がどのように援助するかという事で、活動自体が大きく変わる。また、その中で子どもの体験も深まりを見せ、違う遊びに広がったり発展したりと、大きく変わることを「科学する心」を捉えることを意識して保育や事例の読み取りを行う中で感じた。

また、保育者は保育の中で援助者である。年齢や活動、内容によっては異なるが、子どもの姿を“見守る”ことの大切さ、教材研究の奥の深さ、そして子どもがどのような過程にあるのかを見取る必要性の大きさを感じた。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」